

平成24年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】



平成25年2月
独立行政法人農畜産業振興機構

I アンケート調査

1 経営概況

(1) 飼養頭数

■「200～300 頭未満」10%、「300～500 頭未満」18%、「500～1,000 頭未満」15%、「1,000～2,000 頭未満」15%、「2,000～3,000 頭未満」5%、「3,000 頭以上」6%であった。200 頭以上は69%を占め、中でも1,000 頭以上は26%を占めた。

(2) 経営耕地面積、牧草地

■肥育牛飼養頭数規模別の1経営体当たりの経営耕地面積は200 頭未満が10.2ha、200 頭以上は14.2ha、牧草地は200 頭未満が9.9ha、200 頭以上は51.8haであった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、全体では「畜産専業」64%、「複合経営（畜産＋稲作など他作物）」26%であった。200 頭以上では、「畜産専業」72%、「複合経営」21%、「兼業経営」7%であった。

■経営形態は、全体では「肥育専業経営」56%、「繁殖・肥育一貫経営」21%、「乳肉複合経営」8%であった。肥育牛200 頭以上では「肥育専業経営」62%と、肥育専業経営の割合が高い。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、「2～5億円未満」(27%)が最も多く、平均3億4,100万円となっている。

■肉用牛関連の売上高は、「～5,000万円未満」(30%)が最も多く、平均2億8,140万円となっている。

(5) 労働力

■肉用牛関連に従事する家族労働力は、全体では平均2.6人、200 頭以上では平均3.1人であった。

■肉用牛関連の正社員は、全体では平均6.1人、200 頭以上では平均7.1人であった。

■肉用牛関連の非正社員は、全体では平均5.4人、200 頭以上では平均5.9人であった。

■肉用牛関連の年間臨時雇用者は、全体では平均209.6人日、200 頭以上では平均259.6人日であった。

■肉用牛関連作業における1日当たりの平均労働時間は、全体では7.1時間、200頭未満では6.1時間、200頭以上では7.8時間であった。

2 生産費

■品種別に見ると、肥育牛200頭以上では、黒毛和種802,519円、交雑種585,339円、乳用種378,554円であった。

■生産費に占める「もと畜費」「飼料費」の割合が高く、「もと畜費」「飼料費」を合わせると、概ね7～8割前後となっている。

■飼養規模別にみると、飼養規模の大きい経営体の方が生産費は低くなる傾向が読み取れる。

<生産費>

		もと畜費 (円)	飼料費 (円)	敷料費 (円)	労働費 (円)	獣医師料及び 医薬品費 (円)	資材費 (円)	光熱 水料 (円)	減価 償却費 (円)	施設・ 設備の 修繕費 (円)	委託料 (円)	牧場預 託料金 (円)	農地 地代 (円)	その他 (円)	生産費 (円)	平均販 売価格 (円)
黒毛和種	全体	368,826	272,031	10,371	38,573	9,052	5,247	9,643	23,311	7,352	8,442	35,784	6,306	37,763	832,699	700,037
	200頭未満・計	356,758	295,928	12,097	40,776	10,330	7,346	11,516	33,090	10,506	12,890	53,618	14,224	34,869	893,947	672,517
	200頭以上・計	371,649	261,790	9,649	38,062	8,565	4,277	8,825	19,033	6,205	4,567	27,678	4,263	37,956	802,519	713,091
交雑種	全体	188,705	220,893	9,443	31,658	6,278	2,410	9,031	20,128	6,476	13,069	36,989	2,926	32,137	580,143	462,296
	200頭未満・計	165,571	189,065	14,400	37,099	8,675	2,750	10,574	35,424	16,692	19,637	36,091	19,437	32,137	587,553	438,556
	200頭以上・計	198,831	227,403	8,475	30,881	5,843	2,359	8,722	17,713	5,230	9,720	37,300	725	32,137	585,339	475,672
乳用種	全体	89,647	175,301	10,851	28,490	4,503	1,753	6,461	11,487	4,700	12,916	10,236	4,741	17,673	378,758	253,780
	200頭未満・計	77,500	186,070	17,748	32,485	3,200	2,031	6,611	3,100	3,935	15,940	10,246	4,922	17,673	381,461	240,000
	200頭以上・計	93,307	173,762	9,865	28,194	4,689	1,718	6,446	12,494	4,782	10,998	10,233	4,393	17,673	378,554	256,563

3 もと畜の導入状況

■もと畜の導入先は、品種に関わらず「家畜市場」が最も多い。

■もと畜の外部導入頭数は、肥育牛200頭以上では「黒毛和種」240頭、「交雑種」598頭、「乳用種」679頭である。

■1頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」37.2万円、「交雑種」18.6万円、「乳用種」8.4万円である。

■導入時の1頭当たりの平均体重は、「黒毛和種」267.8kg、「交雑種」200.0kg、「乳用種」197.3kgである。

■もと畜を外部から導入するにあたって重視する点は、「健康状態」(59.8%)、「体型の良し悪し」(57.7%)、「血統」(55%)、「発育状態」(49.8%)が上位となっている。

■もと畜を外部から導入する場合に、「高い」と感じるのは41.3万円、「安い」と感じるのは31.7万円、「高過ぎて買えない」と感じるのは46.0万円、「安過ぎて問題あり」は25.1万円であった。

4 肥育牛の出荷状況

- 黒毛和種の年間出荷頭数は、全体で 202 頭、200 頭以上で 258 頭である。平均販売価格は、市場出荷 70.0 万円（枝肉単価は 1,508 円/kg）、相対取引 72.5 万円（枝肉価格 1,525 円/kg）となっている。
- 交雑種の年間出荷頭数は、全体で 493 頭、200 頭以上で 623 頭である。平均販売価格は、市場出荷 46.2 万円（枝肉単価は 1,000 円/kg）、相対取引 47.3 万円（枝肉単価 968 円/kg）となっている。
- 乳用種の年間の出荷頭数は、全体で 952 頭、200 頭以上で 950 頭である。平均販売価格は、市場出荷 25.4 万円（枝肉単価 553 円/kg）、相対取引 28.4 万円（枝肉単価 613 円/kg）となっている。

5 繁殖雌牛の種付状況

- 黒毛和種の受胎率は、全体では「人工授精」72%、「受精卵移植」51%、「自然交配」75%となった。交雑種は、「人工授精」55%、「受精卵移植」59%、「自然交配」50%。乳用種は、「人工授精」54%、「受精卵移植」62%、「自然交配」54%となっている。
- 精液及び受精卵の外部購入の割合は、黒毛和種では「精液」が9割と圧倒的に多く、血統重視の傾向がうかがえる。

6 飼料の給与状況

- 飼料給与状況について見ると、全体では、「稲わら」、「成畜用配合飼料」、「とうもろこし」、「大麦」、「ふすま」が上位となっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「オガクズ」が圧倒的に多く、使用率は8割前後となっている。

8 取り組んでいる経営努力

- 取り組んでいる経営努力としては、「低価格な飼料調達に努めている」(52.1%)、「もと畜を低コストで導入する」(46.0%)、「低価格な敷料の調達に努めている」(34.1%)、「自社ブランドを確立し、出荷金額を高めている」(27.5%)などの回答率が高く、肉牛生産でコスト負担が大きい「もと畜導入費」「飼料費」に関して、生産コスト低減のための努力が行なわれている。
- 今後3年間の経営展開については、「現状維持」が最も多く5割程度を占める一方で、「肉用牛（肥育）の規模拡大」が200頭未満で18%、200頭以上で31%占める。

II 現地調査

1 ヌレ子導入を主体にした交雑種中心の大規模肥育経営（南九州・M牧場）

■南九州・M牧場の常時飼養頭数は、肥育牛 2,610 頭、そのうち交雑種 2,050 頭（全体の 78.5%）、残りが黒毛和種である。

■M牧場では、肥育もと畜の大部分をヌレ子から導入することで、大幅な経費節減に努めている。平成 23 年度の交雑種の肥育もと畜導入頭数 1,140 頭のうち、960 頭（84%）がヌレ子である。市場に出荷される生後 8～10 カ月齢の子牛は、見映えを良くするために余分な化粧肉が付けられていることが多く、それを一旦落として飼育するのは無駄が生じるため、ヌレ子からの導入を重視している。

■飼料についても、粗飼料の自給や堆肥との交換により稲わらや飼料稲を入手している他、濃厚飼料を配合飼料をメーカー 3 社から購入し、各社の飼料給与による肥育牛群の成績を出して競争をさせ、飼料の質の向上とともに飼料単価の上昇を抑える努力をしている。



粗飼料格納庫

2 おからや稲わらなど地域資源を活用した大規模肉用牛一貫経営（三重県・K牧場）

■三重県・K牧場は、繁殖雌牛 306 頭、肥育牛（黒毛和種）468 頭の肉用牛一貫経営である。

■K牧場では、一貫経営による経営の安定化や収益性の向上だけでなく、新しい技術や機械の積極的な導入による作業の効率化や内製化、おからや稲わらなどの地域資源を活用した生産コストの低減、自社ブランドの確立などに取り組んでいる。

■世界的な穀物相場の動向から輸入濃厚飼料依存の畜



小型4輪のTMR給餌機

産へ危惧を感じた経営主は、数年前に地域の豆腐工場からおからを無料で調達し、これを配合飼料と混合して乳酸発酵させたオリジナル飼料に、堆肥との交換により地域の稲作農家から集めた稲わらや麦・稗を混ぜて TMR 化している。混合割合は肥育牛の成長時期によって異なるが、肥育の全期間を通じて飼料は TMR だけであり、小型 4 輪の TMR 給餌機で肥育牛に給与している。

3 乳用種主体から交雑種主体に転換した大規模肥育専業経営（北海道・A牧場）

■北海道・A牧場は、乳用種と交雑種に加え、黒毛和種の大規模肥育専業経営である。一体的に経営しているB牧場と合わせて約5,000頭を飼養している。

■A牧場では、牛肉の輸入自由化に対応して肥育牛の増頭による生産性の向上を目指し、その過程で、飼養畜種を乳用種主体から交雑種主体+黒毛和種に転換してきた。

■肥育期間短縮技術の確立により、A牧場の肥育牛の出荷月齢は、黒毛和種27カ月齢（全国平均29カ月齢）、交雑種22カ月齢（全国平均27カ月齢）、乳用種19カ月齢（全国平均22カ月齢）となっており、牛舎回転率の上昇や飼料費の低減などによる低コスト生産を実現している。



交雑種肥育牛

4 食品循環資源の飼料利用による交雑種の大規模肉用牛一貫経営（山梨県・K牧場）

■山梨県・K牧場は、①交雑種の飼養・販売を行うK牧場（常時飼養頭数1,300頭）、②K牧場からの出荷、と畜・解体後、加工・販売を行うM直売所、③ハウストマトの栽培・販売を行うA農場の別法人化された3事業部門からなる。

■平成2年までは乳肉複合経営を、平成3年には法人化を、平成4年からは本格的な交雑種の一貫経営を開始すると同時に、現在に至るまでワインを搾って残ったブドウ粕、おから、酒かすなどの食品産業から供給される食品循環資源を飼料として加工し、交雑種の6カ月齢から17カ月齢までの飼養期間に給餌している。これにより、K牧場は約3割の生産費の低減を図り、増頭を実現した。

■K牧場では、平成16年に生産情報公表JAS規格の認定を取得し、JASマークを貼付して出荷している。食品循環資源利用飼料給餌により肥育した交雑種は、生産者こだわりの牛肉“甲州ワインビーフ”として高く評価されている。



甲州ワインビーフ混合飼料